

# 佛蘭西書巡覧 12

平山 弓月

現代においても、ヨーロッパ近世の考え方にその文化一般がいかなるものであるかを根本的に見直そうとすれば、デカルトの考えにさかのぼることが最も適切だと思われるのであります。

野田又夫



「ことば」は文化です。それぞれの「ことば」のはたらきには、それを母語とする人々の世界観、ものの見方考え方が色濃く反映されているのです。異言語の習得には、したがって、彼らの世界観、ものの見方考え方は看過できないのです。

世界観、ものの見方考え方を識るには、やはり哲学・思想を識らなければなりません。最近の学生さんたちには、「哲学書」「思想書」は「なんだか堅苦しくて、難しそう」と思われがちですが、一度時間をかけて対峙してみれば、それは「喰わず嫌い」であったと感じていただけるものと思います。そこで、今回はフランスの哲学者・思想家で近代合理主義哲学の祖といわれるルネ・デカルト *René Descartes (1596-1650)* が、自らの哲学の全貌を思想的自叙伝として著した『方法序説』 *Discours de la méthode (1637)* を取り上げてみましょう。

デカルトは自然を対象に研究していた科学者でした。今で言う理科系の人です。「光学」や「気象学」「幾何学」に関する論文を残しました。彼の時代、学問の言葉はラテン語でしたので、このような研究を彼はすべてラテン語で書いています。しかし、自分の考え方、思考をまとめた『方法序説』は、「生まれつきの理性のみを用いる人々のほうが、昔の書物しか信じない人々よりも、私の意見をいっそう正しく判断してくれるだろう」（野田又夫訳）と考え、フランス語で著しました。

デカルトは『方法序説』で、真理に近づくための規則として次の四つをあげています。一つ目は「明証性の規則」 *évidence* というものです。つまり、自分の「精神に全く明晰判明にあらわれて」、疑うにも疑いえないものでなければ「真」と認めてはならないといえます。二つ目は「分析の規則」 *analyse* と呼ばれるもので、問題をよく解くためには「できるだけ多くの小さい部分に分割」しなければなりませんとしています。

三つ目は「総合の規則」 *synthèse* です。これは、「最も単純で、認識しやすいものから始めて、階段をのぼるように少しずつ、もっとも複雑なもの認識までのぼって」行かなければならないと説明されます。最後は「枚挙の規則」 *énumération* というものです。「何も見落とししていないと確信しうるほど完全な枚挙と、全体にわたる点検」を行わなければならないと記しています。

全ての知識に対して疑念を投げかけ、上で述べたような精神の機能を十全に働かせた結果、デカルトは「われ思うゆえにわれあり」 *Cogito ergo sum. (Je pense, donc je suis.)* という「第一の真理」に至りました。考えている自分というものは、決して疑いえない存在なのです。

デカルトのこのようなものの見方考え方は、フランスの教育の柱の一つにもなっています。子供のころから、常に自己を思考座標の原点に据えて、合理的に考え、自分を表現することを学びます。こんなところを誤解されて、フランス人は個人主義的で、自己中心的だなどという輩がいけないではないのですが、それは完全な間違いです。自己中心的な人はどこにでもいます。ですから少なくともフランス語の構造や本来のはたらきを身につけるためには、デカルトが総合した、近代的合理性を身につけることが肝要なのです。

私たちは「ことば」を通して異文化を理解します。「ことば」と文化が不即不離の関係にあることを認識し、「ことば」とともに異文化の理解に努めることが、同時に「ことば」の構造、はたらきを身につける手段ではないでしょうか。このことはフランス語習得だけではなく、他の異言語習得を目指す場合にも同様のことが言えると思います。

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)